周匝茶臼山城跡と大仙山城跡 ―宇喜多氏による改修、築城の可能性を巡って―

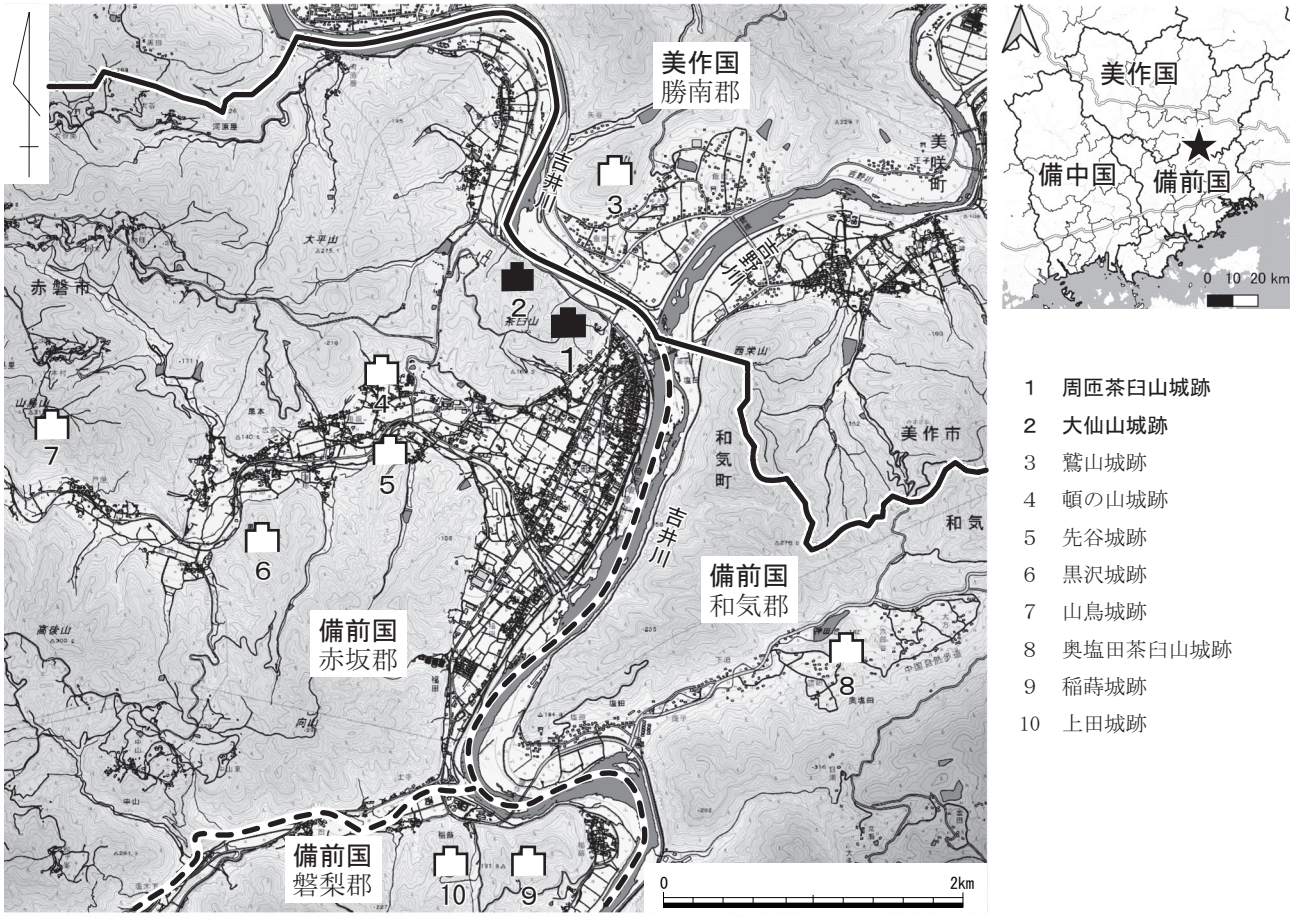
和　田　　剛

はじめに

周匝茶臼山城跡と大仙山城跡は赤磐市周匝に位置する（第１図）。この両城は同一の山塊上に500mと近接して築かれている。また、両城の位置する周匝は、備前・美作国の国境にあたっており、中国山地をその淵源とする吉井川、吉野川という２つの河川の合流地点でもある。加えて備前国赤坂郡、和気郡、そして美作国勝南郡の３郡郡境でもある。さらに、城下には江戸時代に岡山藩六官道の一つに数えられた倉敷往来が走っている。つまり、周匝茶臼山城跡と大仙山城跡は河川・陸上交通路と、国・郡境という政治領域の結節点に位置しているのである。こうしたことから、両城の占める地政学的な地位の高さがうかがえる。

周匝茶臼山城は『備陽記』(1)、『備前軍記』(2)といった地誌類、軍記物に登場する。これらの記載によれば周匝茶臼山城跡は備前国の戦国大名である浦上宗景の勢力下にあり、その配下の国衆・地侍である星賀藤内、あるいは佐々部勘二郎が城主であったとする。一方、大仙山城跡については一切の記録に登場しない。

さて、筆者は平成30年５月に両城を実地踏査し、縄張り図を作成した。その結果、両城併せた規模は東西約700m、南北約400mにも及ぶことが明らかとなった。両城を一体の城として見る場合、その規模は備前国第２位となる。また、個別の城としてみても、周匝茶臼山城跡の面積(3)は約27,000㎡、大仙山城跡にいたっては約35,000㎡に達する。これは備前国東部の城としては傑出した規模であり、主家であるはずの浦上宗景の居城、天



第１図　周匝茶臼山城跡と大仙山城跡の位置（右1/3,000,000　左1/50,000）

※背景地図は国土地理院発行の国土地理院基盤地図情報を基に作成

神山城跡の面積（約25,000㎡）を凌駕する。また、その縄張りは土塁、横堀、虎口、畝状空堀群を伴うもので、備前国東部の山城としては異例の発達を見せている。さらに周匝茶臼山城跡では吉井町教育委員会により実施された発掘調査により、岡山県内の山城としては最大量とも言える遺物が出土している[4]。筆者はこうした周匝茶臼山城跡と大仙山城跡の示す特徴が、浦上宗景配下の一国衆の詰城に比定されうるものかについて疑念を抱いた。そこで本稿では、この両城の城郭史上の位置づけについて、規模、立地、縄張りの３点から考察を深めることを目的とする。結論を急ぐならば、周匝茶臼山城跡と大仙山城跡に現在見る縄張りは浦上氏退去後に、宇喜多氏により改修、築城されたものと考える。

１　これまでの研究

本章で周匝茶臼山城跡と大仙山城跡に関する研究史をまとめる。その上で、本稿における分析の視点について言及する。

先述したとおり、周匝茶臼山城跡は近世地誌類、あるいは軍記物にその名が見える。だが、城郭構造そのものに触れた初出は『改修赤磐郡誌』[5]である。この中で周匝茶臼山城跡には「本丸、二の丸、太鼓の丸」という３つの曲輪が遺存するとしている。

その後、出宮徳尚氏が『日本城郭大系』の中で周匝茶臼山城跡の縄張りについて触れている。氏は周匝茶臼山城跡を浦上方の笹部（佐々部）氏等、有力名主（小国人）により築城されたとする。その上で、山頂部の本丸に対して二の丸は「出丸」的な性格を有すること。加えて麓にある太鼓の丸については、「根小屋（居館）」として構えられたとする。さらに、大仙山城跡について、茶臼山城の出城であると指摘している[6]。

平成元（1989）年、村田修三氏が周匝茶臼山、大仙山両城跡の縄張り図を公刊した。結果、両城とも畝状空堀群を備えること。大仙山城跡はこれに加え虎口、横堀、連続堀切を備え、より発達した縄張りとなっていることが明らかとなった。また、周匝茶臼山城跡は国人層の居城であるとする。その一方、大仙山城跡は戦国大名クラスが築いた「陣城」であると指摘している[7]。

この翌年、周匝茶臼山城跡の発掘調査成果が公刊された。この中で長径約９m、深さ約4.5mを測る大型竪穴遺構の検出されたことが報告されている。また報告者である松本和男氏は、周匝茶臼山城の築、廃城時期を出土遺物の年代から、16世紀前半～後半に絞り込んだ。さらに周匝茶臼山城跡と大仙山城跡の関係についても触れている。氏は周匝茶臼山城跡について天文年間に尼子氏の侵攻に備えた段階と、天正年間に宇喜多氏との戦いに備えて大仙山城跡と併せて再整備された段階の二時期が存在するとの仮説を提示した[8]。

1992年に刊行された『吉井町史』では、編者である伊藤晃氏が周匝茶臼山城跡について天文年間に尼子氏の侵攻に備えて築城されたと指摘している。また、大仙山城跡については天正年間に宇喜多氏との戦いの備えて新たに築かれたものであると指摘している。周匝茶臼山城跡の畝状空堀群も、この時に一体のものとして改修されたとする[9]。

続いて畑和良氏が周匝茶臼山城跡の沿革について同時代史料から検討を加えた。氏の見解に従えば、天文２（1551）年10月から翌月にかけて、出雲国の尼子晴久が軍勢を率いて美作・備前国境へ進出した。その際、尼子勢は「備前すさい」付近まで到達したとする。この時、周匝茶臼山城は浦上氏の勢力下にあったが、尼子氏の攻略により落城したという[10]。

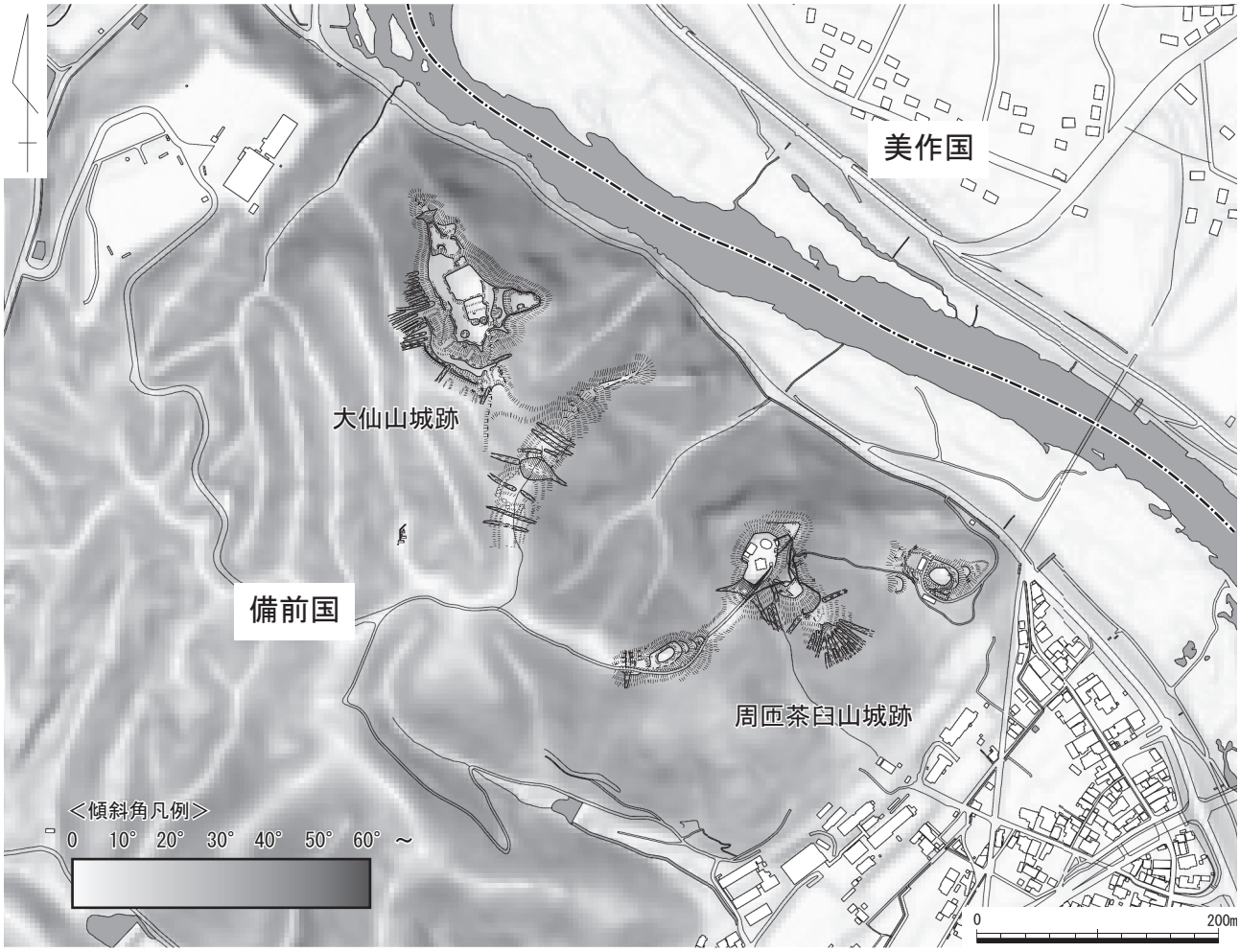
そして2020年、岡山県古代吉備文化財センターが『岡山県中世城館跡総合調査報告書』を刊行した。その総括編において中井均氏は周匝茶臼山城跡と大仙山城跡について触れている。氏は岡山県下の畝状空堀群を３つに分類した。周匝茶臼山城跡はこのうち山城（曲輪を意味するものか、筆者註）の先端部に畝状空堀群を設ける①類に比定する。一方、大仙山城跡は山城の側面に構えられる②類に比定している。特に大仙山城跡の例は土塁、横堀と併用して用いる、「最終形態」の縄張りと評価した。また、こうした発達した畝状空堀群について臨時的な「陣城」として構えられたものと指摘した[11]。

以上のように、周匝茶臼山城跡と大仙山城跡に関しては多くの論者が浦上氏との関わりを想定している。また、周匝茶臼山城跡は天文年間に尼子氏との戦いに用いられた後、天正年間における改修により畝状空堀群が構えられたと推定されている。一方、大仙山城跡については、茶臼山城跡と同時期の「出城」とする見解と、天正年間に「陣城」として築かれた見解の２つがある。

しかし、周匝茶臼山城跡に関しては、城郭の規模、立地、あるいは縄張りといった城郭そのものの属性に基づく評価ではなく、歴史資料、それも編纂物の記述に依拠する見解である。また、大仙山城跡についてはその性格付けについて一致を見ていない。そこで本稿では３つの視点から、両城の特性について検討する。まず第１に統計的な検討を行う。ここでは『岡山県中世城館跡総合調査』の成果を援用し、両城の全長と比高について、備前国の他の城郭と比較する。第２に城郭の構造と縄張りを構成するパーツ、遺構に着目し、城郭分類から見た両城の位置づけを検討する。第３に縄張り評価を加える。ここでは筆者が作成した縄張り図を基に、その縄張り評価を掘り下げる。最後にこれら検討成果を基に、両城の編年的位置づけと築城主体について考察を行う。

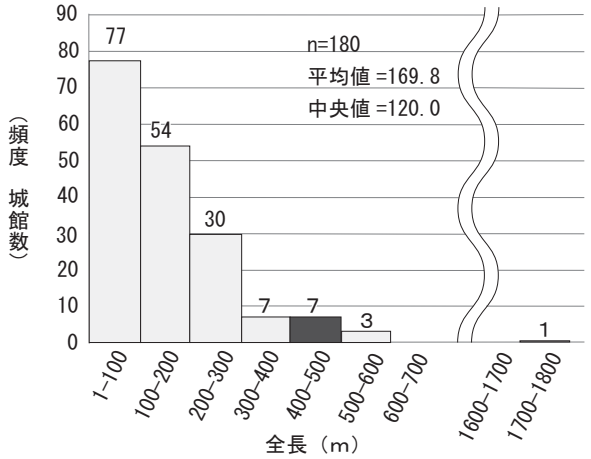
２　周匝茶臼山城跡と大仙山城跡の地理的位置

ここでは、周匝茶臼山城跡と大仙山城跡についての詳細な検討に入る前に、両城の地理的な位置について再確認をしておく（第２図）。なお、第２図では地形図に傾斜区分図を重ねてある。これは地形の傾斜角度（0°～60°）を色の濃さで段階的に示している。まず地形と地質について見ていく。周匝茶臼山城跡と大仙山城跡は周匝盆地の北部にある茶臼山山塊上に位置する。その北麓には吉井川が南流している。この吉井川が備前・美作の国境にあたることから、両城はまさしく境目の城である。その標高は160m、周匝盆地からの比高は110mをそれぞれ測る。茶臼山は吉備高原帯に属し、その地質はハンレイ岩、あるいは結晶片岩からなる。また、吉井川が開削した峡谷の出口でもある。茶臼山の北側斜面は傾斜角60°近い崖となっている。そのため、北方向から両城への登坂は困難である。一方、山頂は傾斜角10°以下の尾根筋となっており、侵入は容易である。

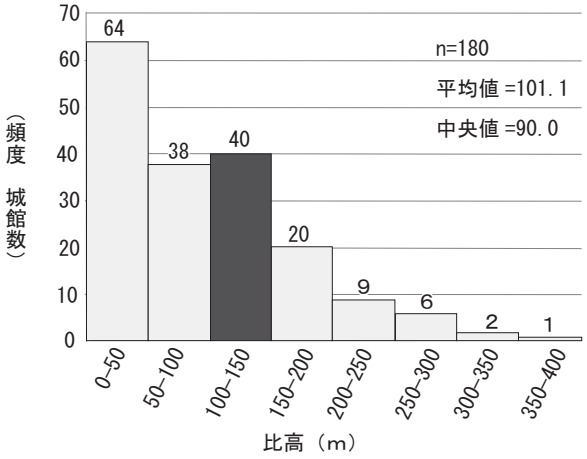


第２図　周匝茶臼山城跡と大仙山城跡の位置関係と傾斜区分図（1/5,000）

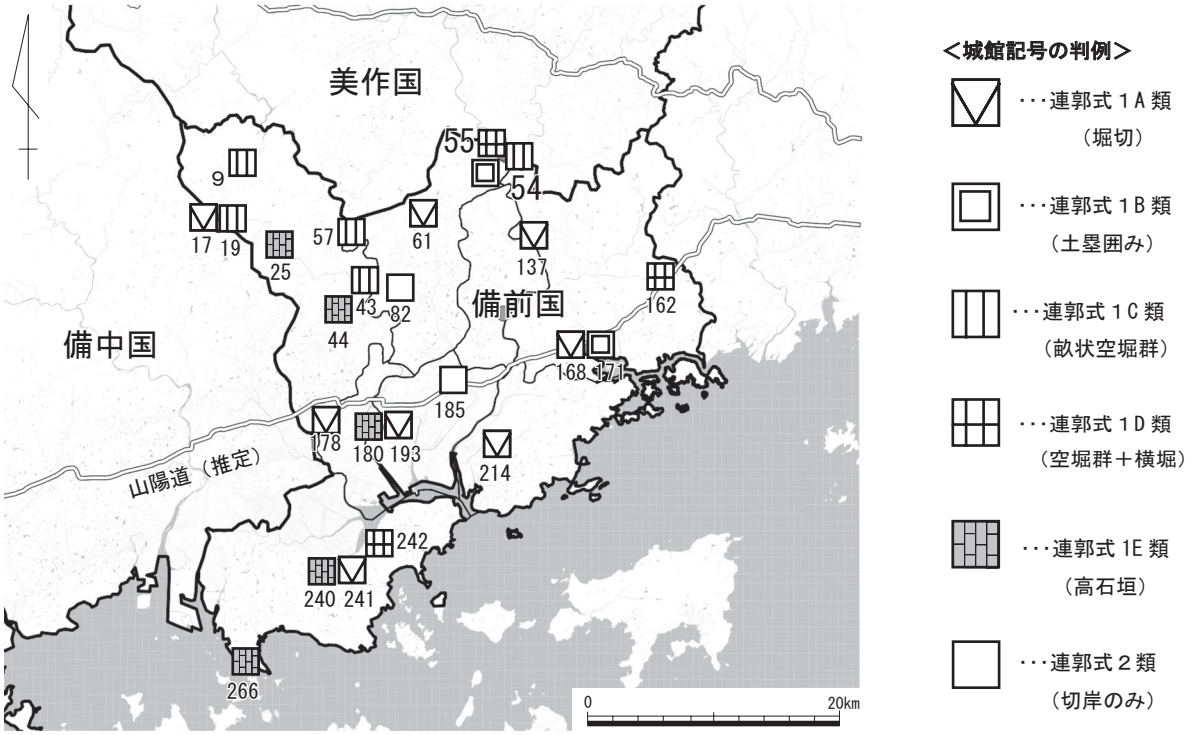
※背景地図は国土地理院発行の国土地理院基盤地図情報を基に作成



第３図　備前国の城郭の全長度数分布図



第４図　備前国の城郭の比高度数分布図



第５図　備前国の全長300mを超える城郭の分類と分布(1/600,000)　※背景地図は国土地理院発行の国土地理院基盤地図情報を基に作成

表１　備前国における全長300mを超える城郭の一覧と分類

番号	城館跡名	比高	全長	分類
9	常江田城跡	80	300	１C
17	藤沢城跡	120	500	１A
19	福山城跡	160	430	１C
25	虎倉城跡	230	500	１E
43	金川城跡	170	550	１C
44	徳倉城跡	160	450	１E
54	茶臼山城跡	110	440	１C
55	大仙山城跡	110	420	１D
57	白石城跡	80	300	１C
61	宮内城跡	80	460	１A
65	黒沢城跡	110	300	１B
82	木山城跡	100	300	２
117	保木城跡	90	400	１A
137	天神山城跡	290	450	１A
162	三石城跡	220	300	１D
168	たい山城跡	140	380	１B
171	富田松山城跡	200	320	１B
178	富山城跡	110	300	１A
180	岡山城跡	10	1800	１E
185	亀山城跡	20	420	２
193	明禅寺城跡	90	300	１A
214	砥石城跡	90	390	１B
240	常山城跡	300	350	１E
241	麦飯山城跡	210	590	１A
242	両児山城跡	50	320	１D
266	下津井城跡	80	600	１E

3　周匝茶臼山城跡と大仙山城跡の規模

ここでは『岡山県中世城館跡総合調査』の成果を基に、両城の規模について検討する。第３図は備前国における城館の全長[12]の度数分布図である。これによると、全長100m以下の城が最も多く（77城）、これに全長100～200mの城郭が続く（54城）。それ以上は全長が大きくなるほど城郭数が減り、全長300mを超える城は18城を数えるに留まる。また、全長300m未満と全長300m以上のデータ区間に大きな格差があることから、これを境に大型、小型城郭の２つに分けることができる。ここで周匝茶臼山城跡、大仙山城跡の両城を見ていくと、周匝茶臼山城跡は全長440m、大仙山城跡は420mをそれぞれ測る。これは第２図の400～500mのデータ区間に該当（黒塗り部分）する。このことから、両城は大型城郭に比定できる。

続いて比高の度数分布図を見ていく（第４図）。これによると全長50m未満の城が最も多く（64城）、これに全長50～100mの城が続く（38城）。周匝茶臼山城跡と大仙山城跡の比高はいずれも110mである。従って、黒塗りとした100～150mのデータ区間に該当する。備前国の城郭の比高平均値は101.1mであり、平均値をやや超える値となっている。そのため山城適地にあたると言えるだろう。

4　パーツから見た周匝茶臼山城跡と大仙山城跡

城郭分類から見た周匝茶臼山城跡と大仙山城跡

ここでは縄張りを構成するパーツ、遺構による城郭分類から見た両城の特性について見ていく。城郭を構成するパーツについては松岡進氏が整理を行っている。氏によれば城郭を構成するパーツは堀切、竪堀等、侵入者の城内への侵入を阻む「遮断系」技術により設けられるものと、虎口、馬出等、侵入者を導線にそって動かし、これに打撃を加える「導入系」技術によるものに大別されるとする[13]。しかしながら中西義昌氏が指摘するとおり、備作地域における山城においては「導入系」技術を洗練させ、主郭への求心性を高めた「織豊系城郭」の導入は天正10（1582）年代まで遅れる。その一方で、土塁、横堀、畝状空堀群を組み合わせた防塁型ラインにより、城域の外周部を取り囲む縄張りプランをもつ「在地系城郭」が主流を占めるとする[14]。すなわち、備作地域おける山城においては松岡氏の言う「遮断系」パーツこそが、城郭分類の指標になり得るのである。

そこで本稿では、山城そのものの曲輪構成と防御型ラインを形成する「遮断系」パーツの組み合わせによる分類を試みたい。すなわち、単一の曲輪からなる単郭式山城と複数の曲輪からなる連郭式[15]山城に分ける。さらに、何らかの遮断系パーツを採用する山城を１類、何らの遮断系パーツを採用せず、切岸のみ防御線とする山城を２類とする。１類について「堀切」、「土塁囲み[16]」、「畝状空堀群[17]」、「高石垣[18]」の４つの遮断系パーツを取り上げ、その組み合わせに基づき分類を試みる。今回、分類の対象としたのは、先ほど確認した備前国における大型城郭、すなわち全長300mを超える城郭である。分類の結果、備前国における大型城郭は以下の６類型にすることができた。

連郭式１Ａ類…連郭式で堀切を採用するもの。
連郭式１Ｂ類…連郭式で土塁囲みを採用するもの。
連郭式１Ｃ類…連郭式で畝状空堀群を採用するもの。
連郭式１Ｄ類…連郭式で畝状空堀群と横堀を採用するもの。
連郭式１Ｅ類…連郭式で高石垣を採用するもの。
連郭式２類…連郭式で切岸のみを採用するもの。

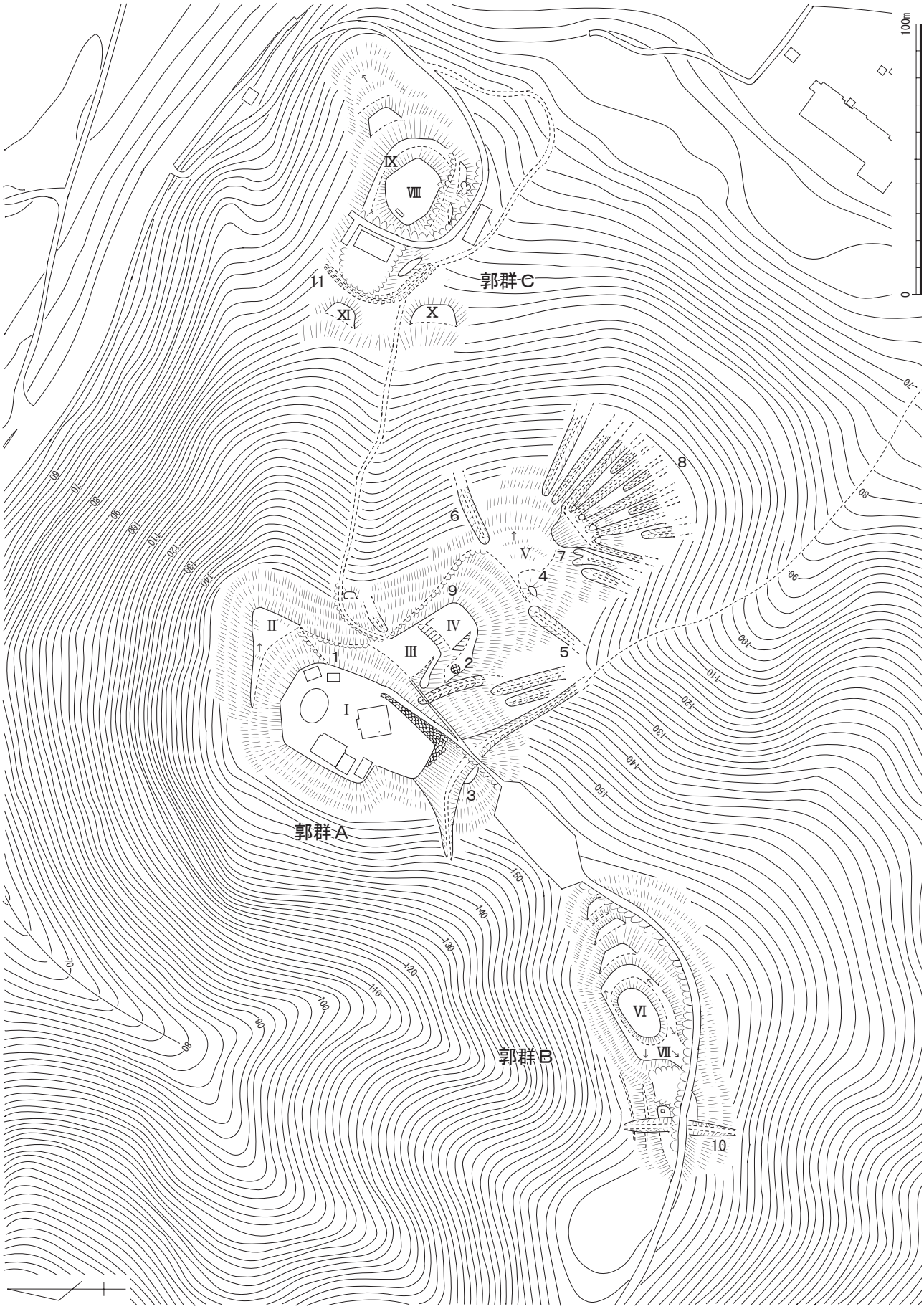
このうち、周匝茶臼山城跡は畝状空堀群を備えることから連郭式１Ｃ類、大仙山城跡は畝状空堀群と横堀の両者を備えることから連郭式１Ｄ類にそれぞれ該当する。

城郭分布から見た周匝茶臼山城跡と大仙山城跡

続いて、分類別に見た城郭の分布を確認しておきたい。第５図には分布を、表１には分類の対象とした城館の一覧を掲載している。

第５図によると、備前国の大型城郭において最も普遍的に見られるのは連郭式山城１Ａ類である。このうち、浦上宗景の本城である天神山城跡（報告書掲載番号137、以下同じ）と浦上氏配下の国衆である羽床氏の城と伝わる宮内城跡（61）の両城は、畑和良氏の検討により天文20（1551）年、天文23（1554）年に、浦上氏と尼子氏が干戈を交えた故地とされる[19]。

続いて周匝茶臼山城跡と同じ連郭式山城１Ｃ類について見ていくと、常江田城跡（９）、福山城跡（19）や白石城跡（57）等、いずれも備前国の周辺部、特に美作



第６図　周匝茶臼山城跡縄張り図（1/2,000）※背景地図は国土地理院発行の国土地理院基盤地図情報を基に作成

国、あるいは備中国との国境領域に多いことを指摘できる。特に福山城跡では天正年間に毛利氏配下の国衆の入城記録が残る[20]。一方、白石城跡には天正年中に宇喜多氏配下の明石氏により築城された記録がある[21]。

次に大仙山城跡の属する連郭式１Ｄ類を見ていく。この類型は大仙山城跡を除くと、わずかに三石城跡（162）と両児山城跡（242）の２城を数えるのみである。これら３城は横堀、畝状空堀群以外に、虎口、土塁囲みとなる曲輪まで備える点も共通している。その分布を見ると備前国と播磨国、あるいは美作国との国境付近に分布する。唯一、両児山城跡のみが国境地帯にはない。だが、両児山城跡は天正10（1582）年２月に毛利氏と宇喜多氏との間で勃発した八浜合戦において、宇喜多氏の陣所となった記録が残る[22]。

以上の分析から周匝茶臼山城跡、大仙山城跡の属する連郭式１Ｃ類、１Ｄ類ともに国境地帯、それも広域権力間の境目領域に分布する傾向を指摘できる。

なお、連郭式１Ｂ類は富田松山城跡（171）のみである。富田松山城跡は最大長約40ｍを測る、土塁囲みとなる曲輪を備える。その周囲に削平段が見られ、多数の兵を入れる駐屯基地として機能したものかと考える。連郭式山城１Ｅ類は岡山城跡（180）、虎倉城跡（25）などが見られ、その分布は備前国東部に集中している。これらは備前国東部の防御を固めるために築かれたものと推察する。また、連郭式２類の城として軍記物等で宇喜多直家の居城とされる亀山城跡（185）が挙げられる。しかし、この城は後世の改変が著しく、築城当時の縄張りについては疑問を残す。

５　周匝茶臼山城跡と大仙山城跡の縄張り

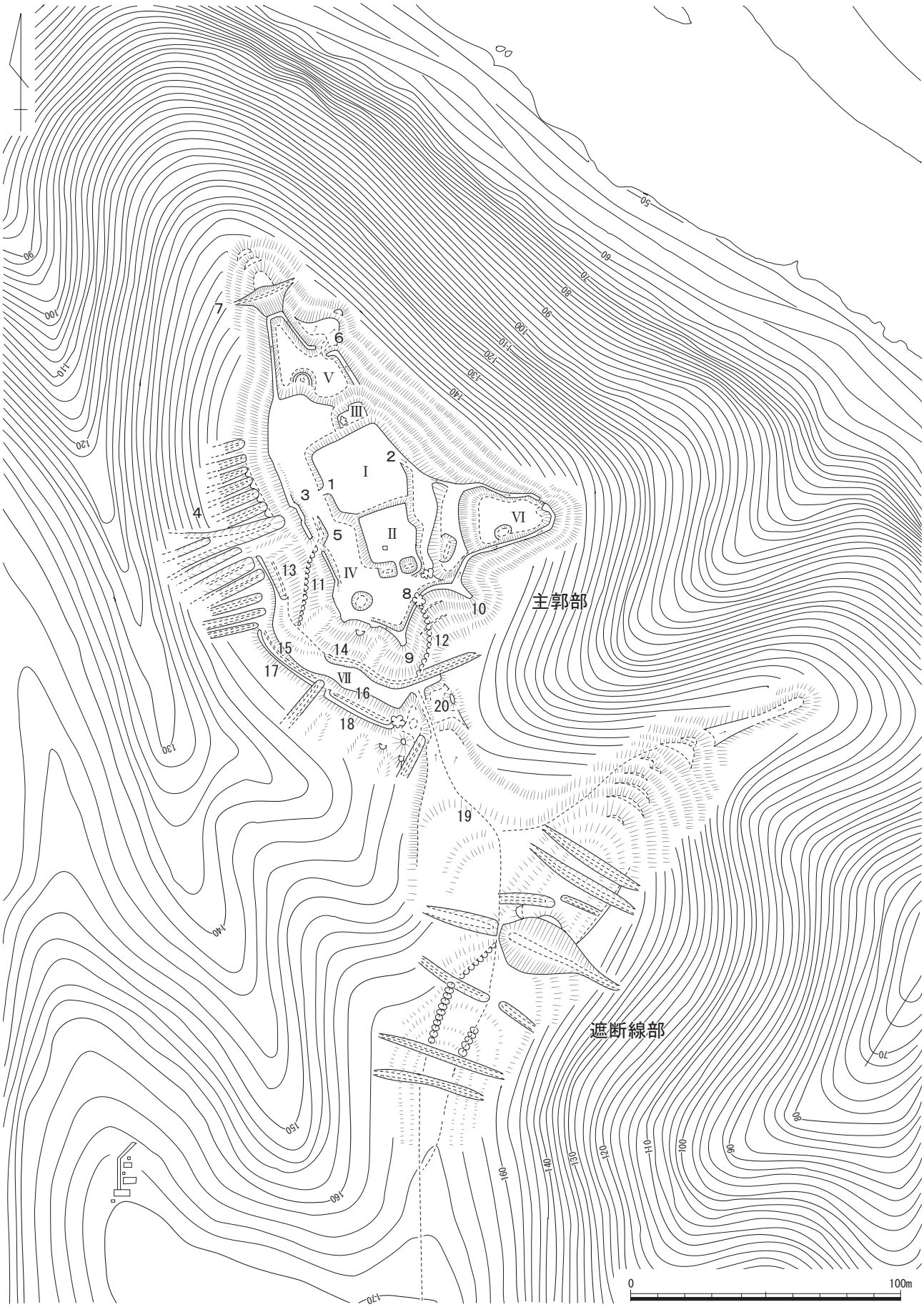
ここでは、周匝茶臼山城跡と大仙山城跡の縄張りについて、筆者が改めて作成した縄張り図を基にその評価を掘り下げる。

周匝茶臼山城跡の縄張り（第６図）

周匝茶臼山城跡は、全長440ｍ、比高110ｍを測る連郭式１Ｃ類の山城である。字「茶臼山」の山頂から山麓にかけて展開する。城域は３つの郭群に分かれており、遠心的な縄張りと言える。さらに各郭群はそれぞれ堀切を備えており、完結した縄張りとなっている。ここではそれぞれ郭群Ａ、Ｂ、Ｃと仮称し、縄張りの詳細について見ていく。

郭群Ａ（通称本丸）は主郭Ｉを含む城内最大の郭群である。その最高所に主郭Ｉを配する。主郭Ｉは南北60ｍ、東西35ｍを測り、城内では最大の曲輪である。平面形は鈎型を呈し、その類線は直線的である。主郭南西側は入隅となっており、切岸を登る侵入者に対して横矢を掛けることができる。現在は模擬天守の立つ東側に入口が設けられているものの、築城当時の虎口の位置は明確ではない。しかし、主郭Ｉの北東に城下から続くつづら折りとなる山道の取り付口１がある。この取り付口１は現状、変電施設などにより改変を受けているものの、つづら折りとなる道が切岸下の曲輪Ⅱ、Ⅲと連絡することから、本来は虎口であった可能性を想定したい。主郭Ｉの北に曲輪Ⅱ、東にⅢ、Ⅳの３面の曲輪が連なる。主郭と周囲の曲輪を隔てる切岸は高さ約８ｍを測る。曲輪Ⅲ、曲輪Ⅳとも平面形は方形を呈する。曲輪Ⅳの西に井戸２が位置する。主郭Ｉの西側尾根筋は深さ約８ｍを測る堀切３により遮断する。堀切３の東側先端は竪堀状となり、20ｍ以上も谷底へ向かって延びている。この堀切３の東側に３本の竪堀が配される。この内１本は主郭の直下まで達している。また、竪堀に対しては曲輪Ⅲ、Ⅳから横矢が掛かる。曲輪Ⅳの南東には不整形な曲輪Ⅴが配される。この曲輪Ⅴの西には土塁の残欠と思われる高まり４が見られる他、曲輪Ⅴに接続するように竪堀５、６がそれぞれ東西方向に延びている。高まり４と竪堀５、６の位置関係から見て、もともとは１条の堀切であったものが、曲輪中央部が削平されたことにより２本の竪堀に分断されたものと考える。曲輪Ⅴの南東には深さ約５ｍ測る堀切７が掘削されている。この堀切は畝状空堀群８と連接している。畝状空堀群８は全部で12本の竪堀からなり、曲輪Ⅴに対して放射状に掘削されている。その他、曲輪Ⅲの西から曲輪Ⅴまでを連絡する山道９がある。この山道９には曲輪Ⅲ、Ⅳからの側射が可能なことから、城道であった可能性を想定したい。

曲輪群Ａから西へ100ｍの位置に、郭群Ｂ（通称二の丸）が位置する。その規模は南北約50ｍ、東西120ｍを測る。最高所に曲輪Ⅵを配する。曲輪Ⅵの平面形は長楕円形を呈し、長径約20ｍ、短径10ｍを測る。曲輪Ⅵの周囲には腰曲輪Ⅶが配される。腰曲輪Ⅶの西側尾根筋には、堀切10を配して遮断する。



第７図　大仙山城跡縄張り図(1/2,000)　和田作図　※背景地図は国土地理院発行の国土地理院基盤地図情報を基に作成

郭群Ａの東約100m、比高90m下に郭群Ｃ（通称太鼓の丸）が位置する。郭群Ｃは東西約100m、南北約60mを測る。城内では最も麓に近い位置にある郭群である。その最高所に曲輪Ⅷを配する。その平面形は不整な円形で、直径は約20mを測る。曲輪Ⅷの周囲には腰曲輪Ⅸが取り巻いている。曲輪Ⅷの西側は現状水道施設により改変を受けているものの、その位置関係から見てこの位置にも曲輪のあった公算が大きい。水道施設の西側鞍部には深さ約１mを測る溝が見られる。この溝には麓から続く道が取り付いている。この溝はその位置と形状から考えて、本来は堀切であった可能性が高い。この堀切11の西側にも曲輪Ⅹ、Ⅺが配される。腰曲輪Ⅸの北東にも爪形の曲輪が見られるが、その先端の造作は判然とせず、自然地形に近い。

以上、周匝茶臼山城跡の縄張り上の特徴についてまとめると、第１に３つの独立した郭群が並立していること。第２に郭群１に集中的な防御型ライン（大型堀切、畝状空堀群、城道）が形成されていること。第３にその一方で郭群２、３の規模は小型で、その造成も判然としない、という３点に集約できる。郭群１はその規模も他の郭群から傑出している。そのため、この郭群のみで完結した防御機能を果たすことができたと考える。

大仙山城跡の縄張り（第７図）

大仙山城跡は全長420m、比高110mを測る連郭式山城１Ｄ類の山城である。城域は連接する２つの尾根上に展開する。その北側の尾根頂部は主郭部にあたり、その外周には畝状空堀群と横堀により遮断線が築かれている。一方、南側は連続堀切と竪堀により遮断線群が形成されている。さらに、これらを連接させることで求心的な防御型ラインが形成されている。また、城内へ入るには主郭部北東側の急斜面を登坂するほか、主郭部西側の谷から回り込むか、南側の尾根筋を経由する３つのルートが想定される。ここでは北側の主郭部と南側の遮断線部とに分けて、縄張りの詳細について見ていく。

主郭部分の最高所には一辺約30mを測る正方形の主郭Ⅰが配される。主郭Ⅰの東、西の両方向に虎口１、２が設けられている。虎口１は平入りであるが、虎口２は坂虎口となっている。そのため、主郭Ⅰから虎口２へ横矢が掛かる。主郭Ⅰの南にも一辺約20mを測る正方形の曲輪Ⅱが連なる。この２つの曲輪と、主郭Ⅰの北に位置する、平面Ｌ字形の小曲輪Ⅲがこの城の主要な曲輪群を構成している。この曲輪群の西には南北約100m、東西約30mを測る腰曲輪Ⅳが配される。腰曲輪Ⅳの西側には、高さ約0.5mを測る土塁３が見られる。土塁３は直下の畝状空堀群４に対応するものである。畝状空堀群４は現状14本確認できる。土塁３の中央部分には幅約7.0mを測る開口部があり、虎口５が設けられている。虎口５から城内へ入るには虎口内部で侵入方向を東から90°北へ屈曲させなければならない。こうしたことから、虎口５は内枡形状を呈していることとなる。

主郭のある主郭部北東は急斜面であると述べた。しかし、この方面への防御も怠ってはおらず、土塁囲みとなる曲輪Ⅴ、Ⅵを設けている。いずれも高さ約1.5～３mを測る土塁により囲繞されている。曲輪Ⅴ、Ⅵの先端には虎口が見られる。特に虎口６は折れ曲がった類線が後方の曲輪と一体となる喰違虎口となっている。敵兵が北方向から主郭部へ侵入を試みた場合、最北部に位置する堀切７を迂回し、この虎口６へ入ることになる。この際に曲輪Ⅴより土塁越しに横矢が掛かる。仮に曲輪Ⅴ内部へ敵兵の侵入を許しても、上位の腰曲輪Ⅳへ退却し、新たな防御線を形作ることが可能となっている。つまり、主郭周囲に重層的な防御型ラインが形成されている。

腰曲輪Ⅳの南に、崩落８が認められる。これは位置と形状から見て、もともとは虎口であった可能性が高い。この崩落８を挟み込むように、その東西にＶ字形に突出する櫓台９、10が見られる。

虎口５、崩落７はその直下の腰曲輪Ⅶまで道11、12により連絡している。山道11に対しては、腰曲輪Ⅳから、山道12に対しては櫓台９、10から側射を浴びせることが可能となっている。こうしたことから、いずれも城道として設けられていた可能性が高い。腰曲輪Ⅶには切岸直下に横堀13、14、曲輪の南西側に横堀15、16が掘削されている。いずれも幅約４～５mを測る点は共通している。だが切岸直下の横堀13、14が深さ約１mを測るのに対して、横堀15、16は深さ約２～2.5mを測る。横堀15、16には土塁17、18が伴っている。横堀15、16はその形状から考えて、主郭部南西からの敵兵を阻む、塹壕状の施設であると考える。一方、横堀13、14は切岸下に取り付く敵兵の足留めを意図した溝状の施設であると考える。また、仮に敵兵が横堀15、16を突破して

腰曲輪Ⅶへの侵入を許したとしても、腰曲輪Ⅳへ退却し、横堀13、14、虎口６を新たな防御型ラインとすることが可能である。つまり、この地点においても重層的な防御型ラインが形成されている。

次に南側の遮断線部について見ていく。この遮断線部は連続堀切６条と２本の竪堀からなる。この地点の標高は約160ｍを測り、主郭部のそれに等しい。そのため、この地点に敵兵の侵入を許せば主郭部への監視が容易となり、攻略のための橋頭堡となる。遮断線部はこの橋頭堡化を防ぐ意図をもって掘削されたと考える。また南の尾根筋から主郭部へは道19により連絡する。道19を経由して腰曲輪Ⅶへ入る直前に土橋20が設けられている。土橋20は幅約２ｍ以下しかなく、遮断線部からの進入路を狭めている。

以上、大仙山城跡の縄張り上の特徴をまとめると、第第１に城域が主郭部と遮断線部の２つに分かれること。第２に主郭部と遮断線部を道、土橋により連接させる求心的な構造をなすこと。第３に主郭部周囲に重層的な防御型ラインが形成されていること、という３点に集約される。特に多重横堀と虎口、道を組みあわせた防御型ラインの形成されている点は、最大の特徴と言える。

６　考察

ここではこれまでの分析成果をもとに、両城の編年上の位置づけと築城主体について考察する。

まずその規模について改めて検討しよう。表１で示したとおり、周匝茶臼山城跡と大仙山城跡の規模は天神山城跡（290ｍ）、福山城跡（430ｍ）といった浦上氏、あるいは毛利氏が拠点とした城郭のそれに匹敵することはすでに述べた。加えて天文年間に宇喜多氏総領の地位にあったとされる宇喜多大和守[23]の城である砥石城跡（390ｍ）を凌駕し、宇喜多直家が拠点とした亀山城跡（420ｍ）に匹敵する[24]。城郭の規模は築城とその維持管理を可能にする築城主体の政治力と相関していることは疑うべくもない。従って、両城とも在地国人の城ではなく数郡、あるいは国境を越える領域を知行する、広域権力体により築城されたと考えるのが妥当であろう。

次に縄張りついて検討していこう。まず周匝茶臼山城跡は畝状空堀群を備える連郭式山城１Ｃ類であった。この連郭式山城１Ｃ類のうち、築城年代の明らかなものとして、白石城跡がある（第８図）。この城は主郭Ｉの北に堀切と複合する畝状空堀群１、２が設けられている。畝状空堀群は主郭Ｉに対してその先端を向けるように掘削している。このように、畝状空堀群が上位の曲輪に対して集中するような指向性を見せることは、周匝茶臼山城跡のそれと共通している。併せて、主郭周囲まで到達する竪堀３や、尾根筋を大きく切断し、先端が竪堀状となる堀切４の形状なども共通する要素と見なせる。白石城跡の築城年代は天正年中に比定されていることから、周匝茶臼山城跡についても同様の年代観を与えることができるだろう。また、この際に築城に関わっていたのは宇喜多氏客将とされる明石行雄[25]とされる。その他、周匝茶臼山城跡と同様に堀切と複合する畝状空堀群を採用する山城として、鍛冶山城跡が挙げられる。この城は備前・備中国境に近い足守・大井に位置する連郭式１Ｄ類の山城で、天正７（1579）～10（1582）年に宇喜多氏が毛利氏の勢力下にある備中国への進出拠点として築城したと指摘されている[26]。

ところで、周匝茶臼山城跡は、遠心的な縄張りとなっていた。郭群１にのみ集中的な防御型ラインが形成される一方、周囲の郭群は小型、かつ削平の甘い状況を看取できた。この周匝茶臼山城跡と同時に尼子氏の攻略によ

第８図　白石城跡縄張り図（1/4,000）　和田作図

※背景地図は国土地理院発行の国土地理院基盤地図情報を基に作成

り落城したと指摘される[27]宮内城跡は、連郭式山城１Ａ類の山城であった。この城は主郭周囲に２つの郭群が並立する縄張りである。こうした遠心的な縄張りは周匝茶臼山城跡と類似する。また、主郭以外の曲輪の造成が甘い点も共通する。

以上の分析結果を勘案すると、周匝茶臼山城跡は、天文年間に尼子氏の侵攻に際して用いられた後、天正年間に主郭周囲のみに集中的な防御型ラインを設ける改修が行われたと考える。そしてその改修主体となったのは、畝状竪堀群の形状などから、浦上氏配下の国衆というよりも、宇喜多氏であった公算が大きいと考える。

続いて大仙山城跡について見ていこう。この城は畝状空堀群と横堀を備える連郭式１Ｄ類の山城であった。さらに枡形虎口、喰違虎口を用いて主郭への求心性を高めていた。連郭式１Ｄ類の内、築城年代の明らかなものとして両児山城跡がある（第９図）。この城は北郭、南郭の二つに分かれるが、南郭に畝状空堀群と土塁、横堀を併用した防御型ラインが形成されている。この城は天正10年２月に勃発した、八浜合戦に際して宇喜多方の陣所となったことはすでに述べた。この城と比較した場合、大仙山城跡は多重横堀が用いられていることや虎口が顕在的であるなどより発達した縄張りとなっている。特に大仙山城跡の虎口６、７は虎口内で侵入者の進路を２回屈曲させるもので、織豊系城郭からの影響を読み取れる。これは木島孝之氏の織豊系虎口分類の第Ⅶ類に相当し、概ね永禄10（1567）～天正７（1579）年の年代を与えることができる[27]。

第９図　両児山城跡縄張り図（1/4,000）　和田作図

※背景地図は国土地理院発行の国土地理院基盤地図情報を基に作成

以上の考察の結果、大仙山城跡の縄張りには戦国最末期における広域権力、それも織田・豊臣氏の影響を見て取ることができた。一方、畝状空堀群は織田・豊臣氏はほとんど用いることがない在地的な要素とされる[29]。つまり、大仙山城跡は織豊系と在地系の両者の特徴を備える城なのである。従って、この城を築城したのは戦国最末期に備前・美作国境に勢力を伸ばした在地勢力であると同時に、織豊勢力とも関係を有した広域権力体と推察する。そしてそれに該当するのは天正７（1579）年に在地勢力である毛利氏から外来勢力である織田氏へ鞍替えした宇喜多氏である可能性が、最も高いと考える。

おわりに

今回の検討結果から、周匝茶臼山城跡、大仙山城跡とも、従来考えられていた在地国衆ではなく、広域権力体である宇喜多氏により天正年間に改修、築城された可能性を指摘できた。これまで宇喜多氏の城郭縄張りを構成する特徴的なパーツとして、折りを伴う土塁囲みとなる曲輪[30]、あるいは石垣[31]が挙げられていた。しかし、堀切と複合し、上位の曲輪へ集中的な指向性をもつ畝状空堀群、さらには横堀や経路に屈曲を伴う虎口というパーツもこれに加えうると考える。

こうした両城の改修、築城の契機については、宇喜多氏が天正７～12年まで続いた対毛利氏戦争において、国境線、いわゆる「境目」地域に橋頭堡を築いた上で備前国から備中･美作国へ進出したこと。岡山城を中心とし、河川交通により結びつく支城網を形成したことと関わると考える。これらについて今後も検討を続けたい。

註

（1）石丸平七郎定良『備陽記』日本文教出版　1965

（2）土肥経平『備前軍記』（『吉備群書集成』第参輯　吉備群書集成刊行会　1921所収）

（3）城館の面積は、縄張り図を地理情報システムにジオリファレンス（幾何学補正）した上で、縄張りの見られる範囲を回転楕円体法により算出した。実測値ではあるが、あくまで参考値として提示する。

（4）『備前周匝茶臼山城跡発掘調査報告書』岡山県吉井町教育委員会　1990

（5）『改修赤磐郡誌』大真屋書店　1980（岡山県赤磐郡教育会　1940を復刊したもの）

（6）出宮徳尚「茶臼山城」『日本城郭大系　第13巻　広島・岡山』新人物往来者　1980

（7）村田修三「吉井町周辺の中世城郭―大仙山・茶臼山を中心に―」『大仙山城址調査報告会発表資料』　1989

（8）前掲註４文献

（9）伊藤晃「考古編　Ⅲ中世」『吉井町史　第２巻』芳井町史編纂委員会　1992

(10) 畑和良「浦上宗景権力の形成過程」『岡山地方史研究』100　岡山地方史研究会　2003

なお、畑氏は『坪井文書（影）』所収の坪井弥三宛浦上宗景書状について、天文20年に発給されたものと推測している。この文書は坪井弥三が「すさい城」を奪還すれば、その方面の所領を加増すると約したものである。氏はこの書状について宗景が周匝方面の尼子氏対策に腐心したものと評価している。

(11) 中井均「岡山県の中世城館跡について」『岡山県中世城館跡総合調査報告書　第一冊　―備前編―』岡山県教育委員会　2020

(12) 全長は、縄張り図において縄張りの見られる範囲の最大長を計測した。

(13) a　松岡進「第７章　戦国期・織豊期における築城技術－研究状況整理の試み―」『戦国期城郭群の景観』株式会社校倉書房　2002

「導入系」技術については虎口の類型化、型式組列化を通じ織豊系城郭の編年案を提示した千田嘉博氏、そして織豊系虎口プランの地域的な受容形態の差異に触れた木島孝之氏の研究は特筆すべきである。

b　千田嘉博『織豊系城郭の形成』東京大学出版会　2001

c　木島孝之「織豊系城郭における虎口プラン変遷の試み」『愛城研報告』第五号　愛知中世城郭研究会　2000

(14) 中西義昌「概説―美作国の山城・丘城・館城―」『美作国の山城』「美作国の山城」編集委員会　2010

(15) ここで言う連郭式とは複数の曲輪を連ねる城郭構造全般を指す。これには複数の郭群が並列する群郭式、主郭を最奥部に配する梯郭式などを包括する概念として取り扱う。

(16) ここで言う土塁囲みとは、一つの曲輪の３辺以上を土塁により囲繞するものをさす。

(17) ここで言う畝状空堀群とは、竪堀を３本以上連続して並べ備えるもののことをさす。

(18) ここで言う高石垣とは、高さ５m以上測るものを指す。

(19) 前掲註10文献

(20) 『萩藩閥閲録』巻三十二　赤川勘解由

(21) 「明石行雄書状」『美作沼元家文書』（『岡山県古文書集』第３輯　思文閣出版　1981所収）

(22) 森俊弘「年欠３月４日付け羽柴秀吉書状を巡って」『岡山地方史研究』100　岡山地方史研究会　2003

(23) 森俊弘「岡山藩士馬場家の宇喜多氏関連伝承について」『岡山地方史研究』99　岡山地方史研究会　2001

(24) 前掲23文献

(25) 大西泰正『宇喜多秀家と明石掃部』岩田書院　2015

(26) 山本浩樹「戦国大名領国「境目地域における合戦と民衆」」『年報中世史研究』中世史研究会　1994

(26) 前掲註10文献

(27) 前掲注13ｃ文献

(28) 畑和良「織田・毛利備中戦役と城館群―岡山市下足守の城館遺構をめぐって―」『愛城研報告』第12号　愛知中世城郭研究会　2008

(29) 中西義昌「概説―美作国の山城・丘城・館城―」『美作国の山城』「美作国の山城」編集委員会　2010

(30) 高橋成計「備前宇喜多氏の陣城縄張りの考察 ― 陣城縄張りの変遷」『中世城郭研究』第28号　中世城郭研究会　2014

(31) 乗岡実「宇喜多氏城郭群の瓦と石垣―岡山城支城群の諸問題―」『吉備地方文化研究』第18号　就実大学吉備地方文化研究会　2008